

小学校における国際理解教育をどう進めていくべきか

高知市立浦戸小学校 教諭 尾崎 美保

1 はじめに

小学校学習指導要領第1章「総則」では、「生きる力」を育むことが最終目標であると述べられている。この「生きる力」は、各教科・領域・総合的な学習の時間等での学習を関連付け、総合的に働かせることで具現化することができる。本研究で意図する国際理解教育も、各教科・領域・総合的な学習の時間等を通して推進されることを前提としているが、現状ではこの趣旨が十分とはいえない状況がある。具体的に述べれば、小学校での国際理解教育＝英語活動といった認識で取り込まれる傾向が少なくないということである。

それに対し、本研究の立場は、小学校の段階からもっと様々な世界に目を向け、英語圏のみに限定されない広い視野をもたせることがより重要であると考えている。なぜなら、小学校学習指導要領総則の冒頭に「進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成する」ことが明確に述べられているからである。よって、小学校における国際理解教育においては、英語圏だけでなく、広い視野にたって様々な国々の人々に対しても、同じようなスタンスで接しさせたいと考えている。その際、ただ知識を獲得するのではなく、自ら主体的にかかわり、探求し、進んで交流しようとする態度の育成も不可欠である。しかし、現状における国際理解教育は知識獲得型学習に偏りがちである。その問題解決の糸口を2点挙げてみたい。

まず1点目は、ただ情報を受け入れるだけの学習を「内なる国際化」と捉えるような国際理解教育への誤認識の打破である。ここでいう「内なる国際化」とは、自らとのかかわりにおいて他国の人々や文化を理解し、自らの思考・判断に基づいて具体的な態度や行動に表そうとする主体的な資質・能力である。この「内なる国際化」の視点で自国・他国に住む人々に関心に向け、その人々について学ぼうとする意欲を持つことや何か行動に表そうとする主体的な資質・能力である。次の2点目は、頭の中だけの国際化では、国際理解教育として意味をなさないということである。国際理解教育は、態度や行動に表してこそそのものである。そのためには、他国の人々との理解、交流、親善を図るために具体的なアクション(自分なりのかかわり行動)を起こすことが必要である。

以上のように、これからの我が国の国際理解教育で培うべき資質・能力とは何かというと、各教科で身に付けた基礎的・基本的内容を基に体験的な学習や問題解決的な学習、自主的、自発的な学習へと促していくところに小学校における国際理解教育の本来的なあり方が見出されてくるのである。

2 研究の目的

本研究では、我が国の国際理解教育の現状を踏まえつつ、育成すべき子どもの資質・能力を明確にした指導観へと転換を図るため、小学校における国際理解教育カリキュラムのあり方とその評価方法を検討していくことを目的としている。具体的な研究推進にあたっては、以下の3側面から考察していきたいと考える。

(1) 研究Ⅰ：我が国の国際理解教育の現状分析

全国の殆どの小学校で国際理解教育が行われているが、その実態は千差万別である。国際理解教育と称しながら、多くは英語活動や諸外国について統一性のない調べ活動を中心とした情報を得るだけといったような国際理解教育が少なくないのも現状である。そこで本研究では、まず手始めに国際理解教育改善の手がかりを得るため、小学校児童及び教職員を対象とした意識調査を実施し、他国の人々や他国の文化に対してどのような関心を向け、どのような学び方をしたいかと（教師側なら指導しようとして）しているのかといった点について解明していくこととした。

(2) 研究Ⅱ：国際理解教育の現状分析に基づいた国際人モデル像の検討

方法論改善のための国際人モデル像を検討するという事は、我が国の国際理解教育において子どもたちに培う具体化された資質・能力を明確にしていくということでもある。本研究がイメージする実在的な国際人モデル像としては、幕末の動乱期に日本人として初めて渡米して欧米の知識を身に付け、我が国の近代国家建設に大きな役割を果たした郷土の偉人、中濱万次郎である。中濱万次郎がなぜ国際人モデル像になり得るのかという点、彼の知的探求心、実践力（思考力・判断力・行動力等のトータルな資質・能力）、平等と博愛の精神についての深い認識や知見等々、大いなる国際人モデルとしての可能性を現代においても体験的に感じることが出来る人物だからである。

(3) 研究Ⅲ：「内なる国際化」を推進するためのカリキュラム開発とその検証

国際理解教育で培う資質・能力は、諸外国に関する事柄やそこに暮らす人々についての知識量を拡大したり、コミュニケーションするための語学力を獲得したりするという「知識獲得型の学び」のみでは成立しない。子ども自身が自ら他国の文化や他国の人々とのかかわりに気付く、かかわりを主体的に拡大し、更には具体的な行動へと態度化させていくような個の変容の促しこそが不可欠である。

この「内なる国際化」を具現化した国際理解教育を実現していくためには、「知識獲得型の学び」をベースにした「課題探求型の学び」による態度形成が求められるのである。知識獲得型学習と課題探求型学習は相対立するものではなく、相互補完的に語られなければならないものである。その実現のためには、子どもの学びをどう考え、どうカリキュラム開発し、どう評価していくのかという一連のカリキュラム・マネジメントが不可欠なのである。実証的な立場を目指している本研究においては、検証授業によってもその実効性も検討していきたいと考える。

3 研究の方法

(1) 研究Ⅰ：我が国の国際理解教育の現状分析と課題検討

小学校における国際理解教育を推進する際、子どもの諸外国に対する興味・関心や国際交流についての具体的行動スキルの実態、求められる資質・能力について検討することは研究を進める上でとても意味があるものと考えている。そのような子どもの国際観・国際交流観に関する意識実態を把握するために、研究の取りかかりとして最初に実施したのが「国際理解についての意識調査」である。

また、教師用意識調査については、国際理解教育についてどのような指導観をもっており、どのような実践を行ったり、行おうとしていたりしているのかの実態を把握することを目的としている。調査方法は質問紙を用いた4件法での回答と自由記述とする。

先行研究の概観：子どもの意識実態を受け、先行研究を概観しながら国際理解教育ではぐくむ資質・能力について検討する。そして、今後の小学校での国際理解教育が目指すべき課題について明確にしていく。

(2) 研究Ⅱ：国際理解教育の現状分析に基づいた国際人モデル像の検討

ここでは、国際理解教育において子どもたちに培う資質・能力を明確にするため、我が国における先人等を手がかりに具体的な国際人モデル像を検討していく。

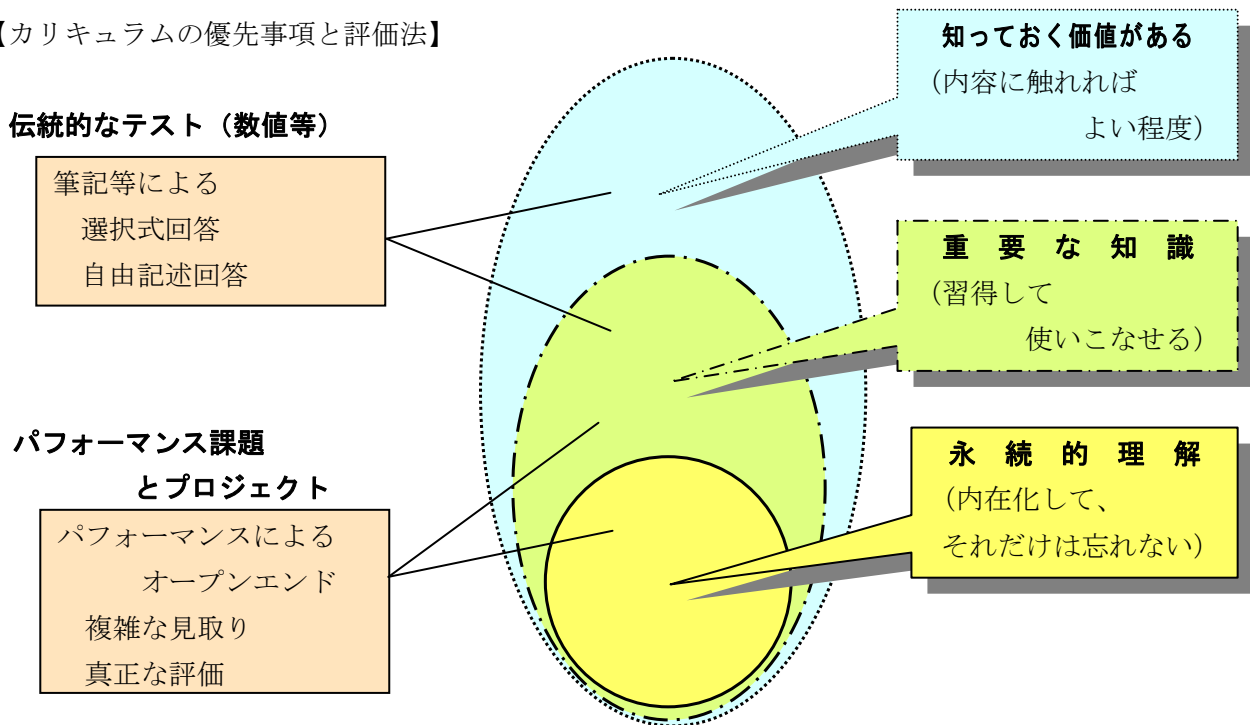
本研究では、具体的な国際人モデル像として中濱万次郎^{註1}を取り上げた。万次郎がハワイから一人決意して米国本土へ渡り、帰国するまでの期間を中心にして、万次郎がなぜそのような国際人スピリッツを抱くまでに至ったかを検証していく。そして、その分析を基に国際人モデル像を子どもたちの学びとどう結び付け、国際理解教育として培う資質・能力形成に寄与させていくかを明確にしていく。

(3) 研究Ⅲ：「内なる国際化」を推進するためのカリキュラム開発とその検証

このような資質・能力形成のために、新たな視点でのカリキュラム開発が急務であり、その実践的な検証が望まれる。研究Ⅲでは、これからのカリキュラム開発の方法論として「逆向き設計」論の理論的援用を試み、これからの国際理解教育で培うべき資質・能力形成の視点から実践的検証を行っていくこととする。

「逆向き設計」論とは何か：「逆向き設計」論とは、①「求められている結果の明確化 (identify desired results)、②「承認できる証拠の決定」 (determine acceptable evidence)、③「学習経験の明確化と指導計画作成」 (plan learning experiences and instruction) という3つの段階を経て、カリキュラムや単元を設計することを主張するものである。教育によって最終的にもたらされる結果から遡って子どもの学びを設計する点、また通常、指導が行われた後で考えられがちな評価を先に構想する点から「逆向き」と呼ばれている。上記のような「逆向き設計」論で提唱されている3つの段階の詳細を明らかにし、カリキュラム設計・単元設計におけるそれら3段階の位置付けを検討する。その上で「逆向き設計」論を利用したプログラム開発を考察していく。

【カリキュラムの優先事項と評価法】



【単元設計のサイクル】

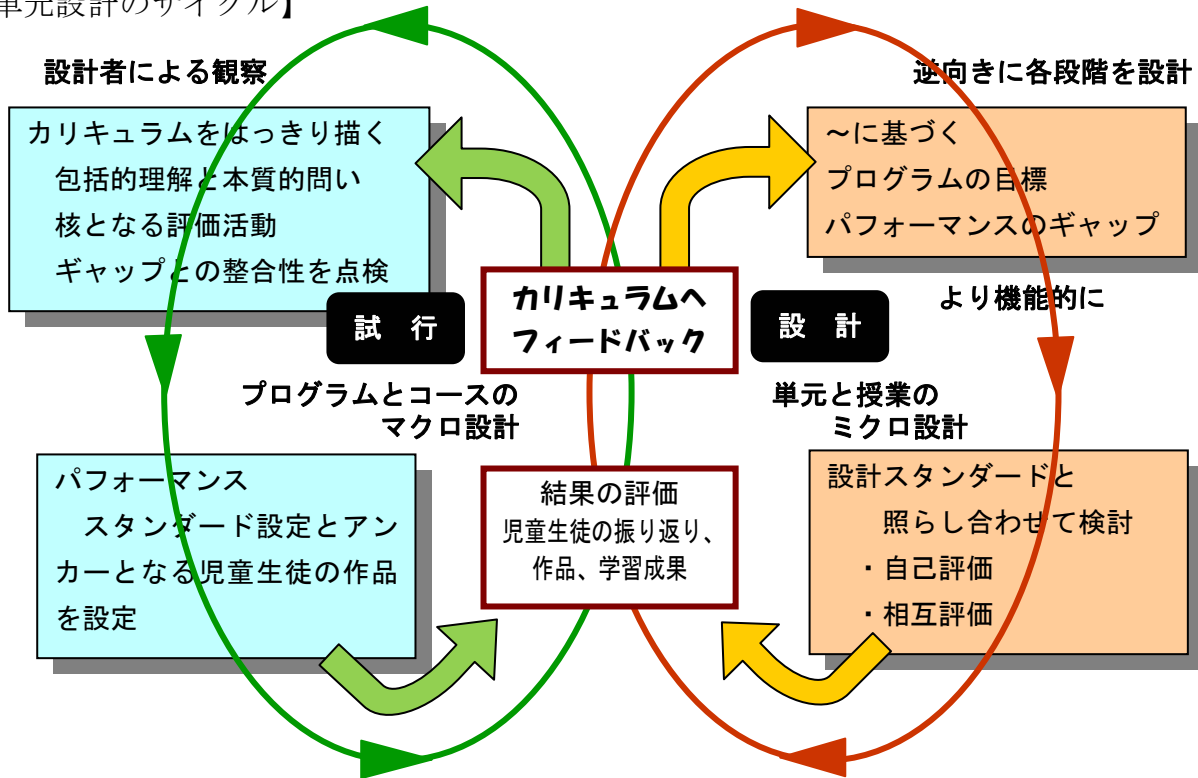


図1 「逆向き設計」論における単元設計構造図（田沼 2007 年による）

【理解(understanding)の6観点（期待するパフォーマンス評価項目）】

◇ 網羅 (coverage) から看破 (uncoverage: 本質的な問いを見抜く) へ

- ①説明 (explanation: 様々な方法を駆使して説明できる。
- ②解釈 (interpretation): 様々な観念・事実・経験と関連付けて解釈できる。
- ③応用 (application): 学習経験の拡大として応用することができる。
- ④パースペクティブをもつ (perspective): 多面的なものの見方、感じ方、考え方ができる。
- ⑤共感 (empathy): 互いの理解について共感的に受け止めることができる。
- ⑥自己認識 (self-knowledge): 自分とのかかわりを保ちながら理解することができる。

4 研究の成果と今後の課題

研究1では、国際理解教育推進に向けて子どもたちがどのような国際観や国際交流観の実態にあるのかを把握した。次にその意識調査データを基に統計解析の手法を用いて「国際交流尺度」開発を試みたものである。子どもたちの国際観・国際交流観について具体的な観点をもって指導していくためには、それがどのような因子で構成されているのか、更には、どのような観点で指導することが子どもの意識実態変容へと結び付くのか、といった客観性を伴う学び変容のスケール開発を目指したものである。本研究では統計解析ソフトSPSSを用い、主因子法（プロマックス斜交回転）によってスケール（尺度）を構成する以下の4因子を導き出した。

各因子の命名は、下位尺度となる設問項目内容の因子負荷量を慎重に検討しながら以下のように行った。

- ・第1因子（国際化促進因子）10項目・・・「外国の文化について興味・関心度を推し量る因子」

- ・第2因子（郷土愛着因子） 4項目・・・「郷土への興味・関心や肯定度を推し量る因子」
- ・第3因子（国際化関与因子） 4項目・・・「外国の文化へのかかわりを推し量る因子」
- ・第4因子（国際市民志向因子） 4項目・・・「国際社会への連帯意識を推し量る因子」

本尺度は、第3章で述べる国際理解教育推進プログラムの検証授業を実践する際の事前・事後調査で集団や個の変容傾向を見取することを目的に作成したものである。活用にあたっては、検証授業前に事前調査を行い、各因子の合成得点平均値から因子毎に子どもたちの国際観・国際交流観の実態を把握し、それを受けた国際理解教育プログラムを構築するための指導方法や教材等を検討する根拠としたい。また、そのプログラム終了後に再度事後テストを行うことで、子どもの事前実態と学習後の変容を比較的に捉えられればと考えている。もちろん、本研究で意図する国際理解教育のキーワードは、「内なる国際化」である。子ども一人一人が自分なりの健全な国際観・国際交流観をもち、それに基づいて行動しようとする関心・意欲・態度を兼ね備えた人間の育成を重視することが、我が国の小学校における国際理解教育充実の鍵であるという立場から、その見取りはここで述べている「国際交流尺度」のみに依存しようとするものではない。つまり、人権を尊重する態度、文化的多様性および相互依存性への関心や認識度合い、異文化に対する寛容な態度、地域・国家・国際社会の一員としての自覚に基づく地球的レベルでの行動力の見取りは様々な教育評価方法を駆使することが不可欠である。なぜなら、子どもたちの現在の学習がその成長と共により膨らみ、より具体的な行動へと発展することにつながるような、意欲付けのための評価、今後の学習につながるアセスメント評価でなければならないと考えるからである。

「内なる国際化」具現のため、ウィギンズ(Wiggins, G. 1998)註2の「逆向き設計」論を援用し、クロス・カリキュラム「浦戸の龍プログラム」(道徳の時間1時間・総合的な学習の時間または学校裁量8時間・合計9時間)を計画し、検証授業を実施した。「国際交流尺度」による事前・事後調査では、5年生で第4因子(国際市民志向因子)のみ1%水準で有意な差が認められた。

研究2では、国際人モデル像の設定による資質・能力の共通理解を図ってきた。万次郎が、なぜ国際人スピリッツを獲得することができたのか。万次郎の生き方から現代における国際人モデル像をイメージするとどのような諸要件が求められるのであろうか。本節では、「内なる国際化」の体現としての中濱万次郎的生き方モデルを検証していった。その過程で国際人モデル具現化に向けて子どもの学びと関連付け、国際理解教育で培う資質・能力形成をどう進めればよいのかを検討したいと考えたのである。

まず、万次郎の価値観あるいは倫理観についてである。万次郎は、偶然漂流して助けられ、米国で暮らすという非常に数奇な運命にあっている。なぜ異国の地で、学問もない、教育も受けていない万次郎少年が適応し、どのような価値観形成をしていったのかという点に着目した。万次郎の倫理観の根源にあるものは何か。何の違和感もなく国際人スピリッツを身に付けるに至った背景の一つには宗教的な教義があり、二つ目には体験的に身に付けた「知の総合化」の発想があったからではないかと推測される。ここでいう「知の総合化」とは、個別に学んだ知識やスキルを相互に関連付け、一つのまとまりある資質・能力を形作ることである。国際理解教育において子どもたちに形成する資質・能力は「内なる国際化」を進める主体としての子ども一人一人のものの見方、感じ方、考え方そのものであり、個別な学びを関連付け結び付けることで大きな力として発揮できるトータルな学力と考えている。このようなバランス感覚の伴う資質・能力を養っていくためには、意図的かつ体系的なカリキュラムによる学びを抜きにしては語れないと考えるものである。

研究3では、子どもたちが自ら積極的に、ウィギンズの提唱する「真正の評価」で示されている「本

質的な問い」に限りなく迫っていくために「逆向き設計」論を援用し、検証授業「浦戸の龍」を実践した。子どもたちが真に楽しいと感じ、生き生きと参加することが大前提ではあるが、さらには疑問を抱き、探求を進めていけるような授業展開を常に目指していくべきであるという考えのもと、二つの国際交流体験授業について触れてみたい。

「中国人の田さんと交流しよう」で最も重視したかったのは、子どもたちのこれまで抱いてきた外国人に対する偏った固定概念を打破することであった。

次に、「青年海外協力隊員の山崎さんと交流しよう」においての実践では、様々な国際援助組織があり、実際に身近な人が世界中へ行って、他国のため、もしくは世界平和に貢献するために活躍しているという事実を伝えたかったのである。それぞれの等身大の体験をした人物が実際に語る言葉は、重みや迫力があり、実感のこもったエピソードで追体験させてくれる。その過程で、子どもたちは自分自身をしっかりと見つけ、アイデンティティをもち、多様さに対して寛容な態度を取ることが、地球市民として必須条件だということを知ったのである。このことは、第2章で論じた国際人モデルとして求められる資質・能力（豊かな人間性をベースとした①知的探求心、②実践力、③平等と博愛の精神、④体験的な可能性の感受）とも、大いに重なり合うものである。そして、まさにジョン万次郎の国際人スピリッツを土台とした「内なる国際化」の具現として、実際にその等身大モデル像の2人が登場したことで、子どもたちに大きな変容をもたらしたと考察できるのである。

今後も「逆向き設計」論の検討を重ね、子どもの知的好奇心をより深く刺激するような（興味を引かれるような）国際理解教育に関する学習内容を編み出していきたいと考える。

5 「内なる国際化」を具現化する国際理解教育推進に向けての提言

(1) 自己理解と自己尊重に基づく自己肯定感をもてるようにする

国際化が進む中であって、国際社会に生きる日本人を育成するためには、日本人としての自覚をもつことから始めなければならないと考えられる。小学校段階での異文化理解は、自国文化を基盤としながら、自国の生活や文化とは異なる国の存在を素直に受け入れる態度の育成から始めるべきであろう。

(2) 地球時代のグローバルな視点をもった子どもの育成を目指す

本研究での国際人モデルとして取り上げた中濱万次郎の生き方の根底にあるインターナショナル・スピリッツは、人生に役立つ本当の学力に基づき、自分らしい生き方を体現できている点にある。これからの国際理解教育では、万次郎のように自分自身をよく知ることや、他者に対する寛容性または共感性を磨くことが何よりも大切であろう。

(3) 国際理解教育促進のためのカリキュラム改善と教材開発を進める

個の「内なる国際化」を具現化した国際理解教育を実現していくためには、知識獲得型の学びをベースにした「課題探求型の学び」が大切なのである。そのためには、子どもに理解させたい内容を明らかにし、段階的に学びを設計し、組み立て、知識理解だけに留まらない、より実践的な態度育成につながるカリキュラム開発を大切にすべきであろう。

(4) 小学校における英語活動の充実を図る

英語圏文化を学習する際、それは異文化の一例に過ぎないという認識させる必要がある。その上で、日本文化との比較や、他の様々な文化背景を持つ人々を理解する手段として活用できるコミュニケーション能力形成をこれから始まる外国語活動に期待したい。

(5) 国際理解教育を推進する教師の資質・指導力の向上を図る

国際理解教育で大切なのは、「学び続ける教師」の姿勢である。教師の学ぶことへのひたむきな姿が子どもたちを高みに導き、未来への夢や希望を膨らませる原動力になるのではないかと考える。国際理解教育推進のためには国際人モデルを標榜する教師の生き方が何よりも重要であろうと考える。

【参考文献】

註1 川澄哲夫編 中濱万次郎集成 小学館 1990年

註2 G.Wiggins. Educative Assessment Jossey-Bass 1998年